

最終段階になって、東浦さんにご意見を伺う機会を得た。お忙しい方なのだが時間を作っていただき(平成22年2月11日)お宅にお伺いした。優しいけれどどこか毅然としたところがあり、少し緊張したが話題が豊富で人を飽きさせないお話し上手、あっという間に2時間近くがたってしまった。

伺った話は、河原節子さんのこと・栗林幸子さんの絵について・「わが町旭」の「千人塚」の文中で思うこと・感謝されることについてであった。

河原節子さん(この時の代表者)

松山城北(ジウホク)高等女学校より約150名が動員で来阪し、現在の赤川三井住友銀行の横にあったアパートを宿舎にしておられた。その中で、前夜夜勤のため6月7日に残っていた15名の方々が空襲に合い、曾我静雄先生に率いられて先生の機転のきいた指導よろしく、全員が無事であった。勿論寮は全焼した。(空襲の中をいかにうまく逃げおおせたか当時を髣髴とさせるお話は長文になるので残念ながら割愛させていただきます。)

栗林幸子さんの絵 6月7日の空襲

淀川河川敷での死体処理の前の風景を見られて、死体はもっと凄いものだったと感慨深げに何度も何度もつぶやくようにいわれたのが、印象的だった。

「わが町 旭」の「千人塚」の文中(遺骨は土中に葬られ、いつしか雑草に埋もれて忘れさられようとしていました。)のくだりは、堤防の工事が何度も繰り返され其の度に塚が移転し、ある一時はそのような状態になっていたとしても、決して忘れ去るといふようなことはなかったとおっしゃられた。

「東浦さんご一家に感謝の拍手」これは司会の高山さん(友人で、よき理解者・協力者)が突然言い出したことで、自分ではごく当たり前のことだと思っています。当時18歳の自分の友人たちは殆ど特攻などで死別したが、激しい空襲にも幸い命を永らえこうして暮せている。残ったものは当然このようにすべきと言うより、心からそうしたいと思っている。中学校で教わった、中国の項羽の「恥ず我、何の顔(カンバセ) あってか父老に見(マミ)えん」の漢詩を書いて、こんな心境ですと。とても謙遜されていた。

公のものに個人的なことをあんまり書いてはと、しきりに言われた。お気持ちを十分お伝えしますからと申し上げて、ようやくお暇をすることになった。

すっかり激しくなった雨の中を歩きながら、今伺ってきた60年前の記憶とそれに連なるさまざまな出来事を思い起こし、よく生きることの難しさと素晴らしさを深く噛みしめていた。改めて東浦さんに「ありがとうございました」と心の中で呟きながら。

〈豊田貴子〉

その日(昭和20年6月7日)私は・・・「回想」

その日私は造幣局にいた。

空襲警報解除と同時に屋上へ出てみると、空からは真っ黒な雨が降り見渡す限りの焼け野原、まだ、所々には火の手が見えた。もうこの世の終わりかと思う気持ちになった。

(後日少しくらいの火の手にはびくともしない自分が恐ろしかったものだ)。

当時、男子局員はほとんど戦場か軍需工場で、残っているのは管理職の男性とあとは女子ばかりでとても心細いことだった。みんな家が心配なので、とにかく女性は帰ってよいことになった。「危なかったらすぐ引き返してきなさい」上司の温かく心強い言葉を背にして、手ぬぐい一本余分に鞆に詰め早速帰路につく。

当時、父が女学校勤めだったので、まずその動員先である大阪城内の師団司令部へ安否を確かめに回った。「生徒全員無事引率して学校へ帰られました」ということを聞いてやっと一安心、さあ自分が帰ろうとしたら、野田橋から北へは電車もなく都島は焼け野原で通行不能になっている。

仕方なく手ぬぐいを道路わきの水に浸して、まだ焼けくすぶって異臭を放っている都島を避け、野田橋から四条畷方面へ迂回して途中道を尋ねながら新森小路の我が家へついたのは夕暮れだった。

勿論、全部歩き通し。歩くのが当たり前みたいな世の中だった。その夜家族が揃ったのは何時ごろだったか記憶は定かではない。自分が生きていたことだけが確かなことだった。

〈豊田貴子〉